

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洸善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？
—こどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別—
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ —間 (はざま) から読む聖書—
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)

目次

罪人を招くイエス	石田 聖実 (2)
よりサクセスフル?	松島 雄一 (6)
罪と救い	福井 智 (11)



罪人を招くイエス

石田 聖実

イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「私に従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。イエスはその家で食事をしておられた時のことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。イエスはこれを見て言われた。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『私が求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

(新約聖書:マタイによる福音書 9章9～13節)

皆さんこんにちは。いつの時代でも税金を払うのは国民の義務になっておりますけれど、イエス・キリストの時代のパレスチナは、ローマ帝国の属州となっておりましたので、税金もローマ帝国に支払わなければなりませんでした。

そのローマから課せられている税金には、いろいろありました。まずひとつは、土地に対して税金がかかっておりました。これは主に農地にかけておりました。これは主に農地にかけておりました。農地から収穫されたものの3割くらいの小麦などを、ローマに収めなければならなかったわけです。次に人頭税。人の頭

の税と書きます。このことのために、時々、国勢調査が行われました。それから、関税があります。関税というのは、だいたい貿易に関わることで、国境とか港などに収税所が置かれて、輸入品に対して、税を課していたのです。そして、何とですね、有料道路とか、有料の橋なんて言うものもありまして、そこを通る時には、税金を取られたんです。こういう税金がローマ帝国の属州であれば課せられたのです。

さて、パレスチナのカファルナウムのある道路に収税所がありました。高速道路の料金所みたいなところ

ろかなと想像します。マタイはそこで通る人から通行税を徴収していました。徴税した税は、ローマに収められます。誰も外国に対する税金を払うことを喜んでいる人はおりませんし、税金に自分の儲けとなる手数料をそうとう上乘せして徴収しましたので、徴税人は大変嫌われており、徴税人イコール悪人というイメージができあがっていました。人々は税を支払う度に、ユダヤはローマの属国だということを思わせられるわけですから、そのために働く徴税人は裏切り者であると思われていたことでしょう。

マタイはどのような理由で徴税人になったかという、実は、このことについて聖書には触れられていないのです。聖書のなかに、もう一人ザアカイという徴税人が出てまいります。こちらの方は、聖書に大変背が低かったと書いてあります。そして、みんなから嫌われていました。おそらく子どものころから、いじめられていたんじゃないか。で、それをなんとか見返してやるために大金持ちになってやろう。大金持ちになるにはどうしたらいいか。そうだ、徴税人になって、みんなから税金をがっばりってやろうということだ。ザアカイは徴税人になったのかもしれない。

マタイの場合にはどこにもその人物像の手掛かりはございません。ただ、いずれにしても徴税人は嫌われていましたので、あまり友達が出来

なかったと言えるでしょう。なにしろ、ユダヤを支配する、ローマの為に働く人だったのですから。

そういう徴税人のマタイが、いつものように一人ぼつんと収税所に座っていました。その時イエスさまが通りかかって、彼の前で立ち止まって「私に従いなさい」と言うんです。マタイもイエスのことは、最近評判になっている先生だと聞いていました。彼がいつものように収税所に座って仕事をしていると、そのイエスさまが自分の目の前にやって来たのです。しかも、「私について来なさい」と言うのです。マタイは、一瞬の内にもいろいろなことを考えたに違いない。このまま徴税人としての仕事をやっていけば、多分、生活に困ることはないだろう。ある程度の収入は、確保出来るだろう。でも、みんなから嫌われて友達も出来なくて、それで歳をとって行く。一体、老後にどうという楽しみがあるのだろうか…。イエスさまと一緒にいけば、自分を嫌っている町の人々とはさよならして他のところに行けるのではないか、多分そんなことを考えたのだと思います。マタイは、すぐに立ち上がって、イエスについてまいりました。そして、その晩は、マタイの新しい門出を祝う為に宴会が開かれたのでした。当然、自分をスカウトしてくれたイエス・キリストとその弟子たちが、メインゲストです。そして、どうせ宴会をやるわけですから、なるべく大勢のお客さん呼びたい。で

も、マタイの家の宴会に来てくれる人は、どういう人でしょうか？ 同じ徴税人の仲間。そして、みんなから嫌われ、蔑まされているということで繋がっている人たちでした。特にユダヤ教の律法に厳格な人たちやファリサイ派の人たちから、罪人だと思われていた人達です。こういう人達がマタイのところに集まって来たわけなんです。

さてマタイの家が賑やかなものですから、街行く人はみんな何をやっているのかと思って見ていきます。その中には、先ほど言いました、律法に厳格なファリサイ派の宗教家たちもいたわけなんです。で、その人たちがマタイの家をのぞいてみると、そのメインゲストにイエスさまがいる。えっ、イエスじゃないか。なんでこんなところにいるのだ。なんで、こんな悪い奴らと一緒にいるのだろうか。そう思ってたまたま出てきた弟子に、「おい、お前のとこの先生はなんだよ。どうしてこんなところにいるんだ」と言った。そしたら、それを聞いていたイエスが答えたのでした。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人だ」

聖書は、私たちの魂が健康に生きるために、必要なことが書いてある書物です。それを人々に教えるのが、イエス・キリストの務めでした。自分は正しく生きていると、そう思っている人たちは真剣に聖書に向かおうとはしません。しかし、自分では正しく生きられないと思う人は、どこか

に救いを求めていきます。その人たちが読むべき本が聖書だと言うわけです。聖書には、神の言葉が記されています。自分は正しいからなんの助けもいらないと思っている人は、かえって自分の中にある病気に気づかない場合もあります。健康な場合もそうでしょう。自分は健康だと思っていたら、医者には行きません。そして、気がついたときには手遅れになっている時があります。自分は正しく神を礼拝している。自分は社会でまっとうに生きていると思込んでいる人が、陥る病気です。それは一つには人々への配慮。特に弱い人々への配慮が欠けてくる事です。イエス・キリストは、ここで旧約聖書から神さまの言葉を引用しました。「わたしが喜ぶのは、愛であっていけにえではなく、神を知ることであって焼き尽くす献物ではない」(ホセア書6章6節)

マタイは罪人であると人々から嫌われていようと、そのため嫌われていようと、イエスさまは心からマタイを受け入れ、愛されました。それと同じように、神様が私たちに望んでおられるのは何かということ、私が正しいお前が間違っていると裁きあったり、あるいは憎みあったりすることではなくて、赦し合い心から愛し合うことです。でも、それは私たちにはとても難しいことです。神様がまず私たちを愛して、どうしようもない状態にいる時に、声をかけてくださる、そして愛していただく。そ

のを知るといことから始めた
とが出来る人へと変えられたと思
いと思います。そして私たちもまた
うのです。
全ての人を受け入れ、愛に生きるこ

(いしだきよみ 尾陽教会牧師 2011.9.27 チャペルアワー奨励)



よりサクセスフル？

松島雄一

「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。早速、五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと精算を始めた。まず、五タラントン預かったものが進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』次に、二タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。』主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だ知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そ

うしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持つてる者に与えよ。だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』

(新約聖書 マタイによる福音書 25章14～30節)

マザーテレサという人をご存知ですか。インドで病気になったり老いたりして道端に捨てられたような状況にいる人々のために、生涯を献身的に捧げて働いた、ローマカトリック教会の修道女です。ノーベル賞も受賞しました。彼女がアメリカの女性ジャーナリストのインタビューを受けた時のことです。ジャーナリストは、ちょっと意地悪な質問を彼女にぶつけました。「あなたが今、お助けになっている人々以外にも、はるかに多くの人々がもっともっと悲惨な状態の中で苦しんでいます。そういう現代社会の歪み、根本的な矛盾を、取り除くことに全力を尽くして取り組むほうが、もっとたくさんの人々を救えることができ、よりサクセスフルなのではないでしょうか」と。

サクセスフルとは上手くいく、成功する、首尾良く物事がはこぶという意味です。それに対しマザーは微笑んで、こう答えました。「イエスは、私たちにサクセスフルであれとは言っていません。フェイスフルであれと言っています」と。

フェイスフルとは「忠実な」という意味です。上手くやれではなく忠実であれと神様は私たちに命じています。神様が人となったお方イエス。神であるお方でさえ、十字架に付けてしまったこの世。神でさえただただ黙って、息をひきとるしかなかったこの世です。私たちは、そういう世界に生きています。言葉が過ぎるかもしれないですが、邪悪が溢れる世界に生きています。そのこの世で、私たちの働きがすべて上手くいく、すべて成功することは、ほとんどありません。

しかし、この世は私たちにうまくやれ、サクセスフルであれといつも求めてきます。やがて、いい企業に入って、いい旦那さんを見つけて、うまくいいお嫁さんをもらって、うまくやって、うまくやって…、みなさんには知らず知らずのうちに絶えずそう求められているのではないのでしょうか。しかしそれにまともに対応し、なおかつ「うまくいくこと」が人生の一番大切な価値であると思って皆さんがこれから生きて行けば、必ず「怒りんぼー」になります。憎しみやヤキ

モチに悩み、苦しい思いで辛い、暗い、悲しい迷い道に入ってゆきます。

十字架上のイエスに向けて人々は嘲って言いました。「お前が神だったら、天使の大群を呼んで来て自分を救ってみろよ。そこらにいるローマ兵なんかバッサバッサと殺してしまえるはずだろう」。まさに悪魔の誘惑です。主イエスはこの誘惑を拒絶しました。主イエスは「うまくやる」ことより、「敵を愛し迫害する者のために祈れ」という神の愛の戒めに忠実であることを選びました。私たちにとっても、たとえうまくはやれなくても「忠実である」ことが、どんな状況の中でも、結局はいちばん大切なことだと思えます。

さてここで、先ほどお読みいただいた、「タラントンのたとえ」に耳を傾けてみましょう。旅に出た主人から預けられた二タラントン、五タラントンというお金。これ、すごい大金なんです。何億円なんです。この大金を商売で倍に増やした者たちを主人は祝福いたしました。しかしそれは決して彼らがうまくやった、サクセスフルに振舞ったことへの祝福ではありません。主人はこう言っています。「忠実な良い僕だ。よくやった。あなたは、わずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。さあ、喜んでくれ」。もし、仮に彼らがしくじって、預けたお金をすっかり損してしまっても主人は、やはり彼らを祝福したでしょう。

多くのものの管理。すなわち、神の

国の喜びに入っただけでこられるか否かは、うまくやったかどうかではなく、忠実であったか否かにかかっていたのです。

逆に一タラントンを預けられた者は、大金を無くさないよう地面に埋めて、隠しておきました。主人が「さあ、君はどうだった」と尋ねると、彼は答えました。「御主人様、私はあなたが種など蒔きもしなかったところでさえ無理やり刈り取ろうとするほど、それほど残酷な人だと知っていたので、恐ろしさのあまり、お金を地面に隠しておきました。ごらんください。これがそうです」。主人はそれを聞いて怒りました。「怠け者の僕よ。せめて銀行に預けて利子くらいは稼げなかったのか」と。

この、不忠実な僕の失敗は、主人がほんのわずかなしくじりでも厳しく罰する人間だと勘違いして、ブルブル怯えていたことであります。主人が、目に見える結果にしたがって評価するにちがいないと、勘違いしていたのです。

スポーツマンはよく言います。「結果が出せてよかった」と。結果を出す。それは、大変な努力と才能、そして幸運に恵まれなければ達成できません。その大変さに直面して、サクセスフルであること、うまくやることを追い求めることがいつのまにか、しくじりを避けることとすり替わってしまう。何かやって失敗したら怖い。それなら何もやらないでじっとしていようということになってしま

いがちなのです。

タラントンは今日の「タレント(才能)」という言葉を生みました。しかし、教会は、少なくとも伝統的な教会は、タラントンを各人の才能であるという解釈はしてきませんでした。もし、タラントンを神様から各人がいただいた才能にすぎないのなら、今日読まれた福音はつまらない話です。「めいっばい才能を生かして生きてゆきなさい」。これはどこかの音楽教室やスポーツクラブで私たちが叱咤激励する言葉と同じです。そうではなく、私たちひとりひとはその具体的な状況の中で、神様から与えられた課題(タラントン)——それは多くの場合、愛の課題です——から逃げることなく、背負うべきものを背負っていく忠実さが求められている、それがこの福音の真の意味であらうかと思えます。

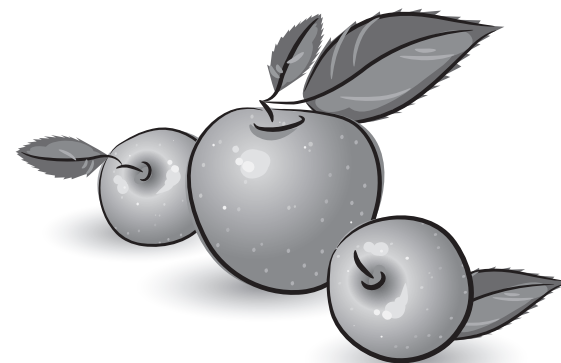
私たちは、いずれにせよ、それぞれにタラントンが与えられています。でもそれを受け止めることから、意識的にも、無意識的にもいつも怯えて逃げ回っているのではないのでしょうか。

キリストが最後の晩餐で聖体礼儀をお定めになり、世の終わりまでこれを行い続けよと命じられたのは、この私たちの姿を見越していたからではないのでしょうか。神が私たちの

成功ではなくご自身への忠実さ、愛を求めていること、その私たちへ神の愛が約束しているものを、私たちが決して見失わないためです。しくじった者も、うまくやった者もキリストが定めたこの晩餐の宴に共に招かれ、主のお体と血によって神の愛を分かち合います。そこで私たちは、私たちの唯一の希望である「神の国」へと聖霊の神秘によって上げられ、そこに臨在するキリストを神の愛として、神の赦しとして、神の祝福として体験します。私たちからおびえは取りのぞかれ、勇気が与えられます。神に忠実であること、すなわちそれぞれの生活、子の親として、夫として、妻として、職業人として、学ぶ者として、病氣と闘う者として、死に向かいあう者として、…そのような目に見える具体的な現実の中で、まさに「神の愛の器」として、「キリストの満ち満ちた徳の高さにまで」(エフェス4:13)高められてゆこうとする勇氣です。愛の課題にしくじり続けた私たちの、この世的な荒れ果てた思いからは「途方もない」としか見えない「企て」への勇氣です。この世があたえる報酬への期待ではなく、来るべき「神の国」への希望と確信だけが与えることのできる勇氣です。

…互いに悪口を言い合っているあの人と、和解する勇氣です。

(まつしまゆういち 名古屋ハリストス正教会牧師 2011.6.7 チャペルアワー奨励)



罪と救い

福井 智

彼は答えた。

「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

神は言われた。

「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」

アダムは答えた。

「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」

主なる神は女に向かって言われた。

「何ということをしたのか。」

女は答えた。

「蛇がだましたので、食べてしまいました。」

主なる神は、蛇に向かって言われた。

「このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかを砕く。」

(旧約聖書 創世記3章10～15節)

「罪と救い」について考えてみたいと思います。「罪」あるいは「救い」と聞かれて皆様は何を連想されるでしょうか。私は「罪」からアダムとイブのことが頭に浮かび、「救い」と聞けばやっぱりイエス・キリストのことを思い浮かべるのであります。

聖書によりまずと人間の罪は、アダムとイブが食べるなど神様から命じられていた木の実を食べてしまった

ことから始まったとされています。

聖書にこうございましたね。神は言われた「取って食べるなど命じた木から食べたのか」

それまでアダムとイブは互いに愛し合い、かばい合って、愛の中に生きていたのであります。しかし禁断の木の実を取って食べるという出来事は、二人を変えてしまいました。お互い愛し合うのではなく、責任をな

すり合うようになったのであります。いざというとき、かばい合うのではなく、それぞれが自分のことだけを考えるようになったのであります。

そんな自己愛に落ちていく姿がこう書かれていました。

食べるなど命じた木から取って食べたのかと神様に言われたアダムは、自分を愛するため責任転嫁を試みるのです。食べた事実を素直に認めようとはせず、妻が悪いのだと言い開きをするのです。

「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました」と。

イブはどうだったでしょう。慌てたと思います。そこで神様に問われたとき神様にしかれることが怖くて、素直に自分の過ちを認めようとはせず、蛇の責任にしようとしします。

女は答えた。

「蛇がだましたので、食べてしまいました」

この夫婦、アダムとイブは、神様にしかれたとき、自分以外に責任を転嫁し、自分は助かる、自分以外に責任をなすりつけてでも生きていこうとする自己愛にはまったのであります。

このような罪、自己愛はどういった結果を生み出すのかということについて聖書にたくさん書き出されております。

たとえばアダムとイブの物語の後に出てきますカインとアベルの話もそうです。アダムとイブの最初の

子供でありますカインは、弟のアベルを野原で殺害するのです。神様が弟の仕事のほうをほめたので、自分が世間や神様に認められないのは、きっと弟がいるからだ、弟のせいだ、弟がいなくなったら、神様も世間も自分に振り向いてくれるだろう、愛してくれるだろうと考えたのです。カインは自分を愛するがゆえに弟を殺害してしまったのです。

こうして人類の自己愛的生き方、自分を愛するためには人や神様も無視するといった生き方がどんどん増え、はびこっていくのであります。

しかし、今日一緒に読みました聖書の最後のセンテンスには希望も書かれていたように思うのであります。

15節にこうありました。

「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかを砕く」

これは他者への愛を取り戻すその原型となる方がイブの子孫から生まれるという暗示であります。

その予言の成就…自己愛ではなく隣人愛に生きる生き方が尊い、そんな生き方こそが人を救うのだと宣教されたのが、イエス・キリストであったと言えましょう。

「彼のかかを砕く」というのは、イエスも犠牲をはらって、かか頭に釘が打たれることを表していると思います。「彼はお前の頭を砕く」というのは、イエスの愛の生き方が、自己愛的生き方を砕いてしまうことを預言しているのではないかと思います。

アダムとイブは自分を守るため、自分以外を犠牲にしようとしてしまいました。しかし、イエスという方は、人を罪に定めたり、裁いたりしませんでした。そればかりか、人々の罪さえ自分のこととして担い、生きたのでありました。

聖書によりますと、十字架に自分をかけた人さえ、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているか知らないのです」といって赦し、愛されたのでございました。

私たちは、つつい自己愛にはして、うまくゆかないことは、人やときには神様のせいにさえます。

(ふくいさとる キリスト教センター主事 2011.12.2 チャペルアワー奨励)

しかし、それは仕方のないことかもしれない。なぜなら私たちもまたアダムとイブの血を受け継いでいるからであります。

しかし、にもかかわらずイエス様に学ぶとき、イエスの救いの血が私たちにもしみ込んでくるのであります。それは、自己愛から隣人愛への転換です。時間もかかり、勇気もいるかもしれない。しかしこのイエス様の生き方に、私たちも倣ってゆきたいものです。

今日は創世記から、罪と救いについて、ご一緒に考えてみました。

